

伊藤克巳 学位（博士）請求論文審査報告書

題目 プロテー・ウーシアー $\pi\rho\acute{\omega}\tau\eta\ \omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$

—アリストテレースにおける「第一の実有」について—

本論文は、アリストテレースの哲学において中心課題として極めて重要な位置を占める「実有」 $\omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$ の中でも、とりわけ「第一の」と限定される「第一の実有」 $\pi\rho\acute{\omega}\tau\eta\ \omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$ について、『形而上学』A巻、『形而上学』Z巻の考察を基に、哲学史において最も有名になってきた『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の用例(*Cat.* 5. 2allsq.)を再検討することにより、「第一の実有」の内実を明らかにするものである。

『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の用例(*Cat.* 5. 2allsq.)は、伊藤氏によれば、アリストテレース著作集 *Corpus Aristotericum* 中の用例を代表するものではなく、内容的にはむしろ他の箇所述べていることとは観点の異なる、独特な叙述となっている。にもかかわらず、解釈の伝承に関する歴史的な経緯から、このいわゆる「個体」を示す用例が、アリストテレースの「第一の実有」（いわゆる「アリストテレースの第一実体」）についての代表的見解とされてきた。その背景には、『カテゴリーアイ』での記述が、通常、アリストテレースの哲学の中で最も重要な議論のひとつであると考えられ、「第一の哲学」についての主要な考察であると考えられる『形而上学』A巻、『形而上学』Z巻における論述とは、直接のかかわりがない、とされてきたことがある。伊藤氏は、「第一の哲学」での文脈に即した「第一の実有」とは一体何なのか、また、この歴史的に最も有名になってきた『カテゴリーアイ』での「第一の実有」をどのように理解すればよいのか、を本論文で明らかにしていく。

本論文では以上の問いに答えるための方法として、まず、本来の「第一の実有」とは一体何なのかを、『形而上学』A巻、Z巻についての考察を通して探求する（第1章、第2章）。そしてその探求の成果を踏まえた上で、古来、問題となり続けている『カテゴリーアイ』での「第一の実有」の真相がどこにあるかを究明する（第3章）。それぞれの議論を、文献学的な成果も踏まえて丹念に検討し、考察を加えている。

『形而上学』A巻も『形而上学』Z巻も『カテゴリーアイ』も、それぞれ大変に難解な議論を扱うものとして有名な著作である。本論文が課題にしている「第一の実有」については、例えば『形而上学』Z巻では、いわゆる「質料・形相論」の論点から錯綜した議論がなされてきた。『カテゴリーアイ』については、解釈の問題からさらには著作の真作偽作すらも問題になってきた。伊藤氏によれば、『形而上学』A巻、『形而上学』Z巻、『カテゴリーアイ』の順に、「第一の実有」についての解釈の難易度が増していく、という構造になっているという。

このような課題を総合的に探求することを目指して、最初に、「第一の哲学」の全体像を明らかにする形で、「第一の哲学」について全領域的に論じており、「すべての「実有」」について論じている、『形而上学』A巻の議論を検討する(第1章)。これは、後の時代にいわゆる「形而上学」と名付けられた学問のことを、アリストテレス自身は「第一の哲学」と呼んでいた、その課題に直接に挑むものといえよう。

本論文の考察により、伊藤氏は、『カテゴリーアイ』という書物が、アリストテレスの解釈という枠組みを超えた地点でも考察せざるをえないような、大変に豊かな哲学的含意に満ちており、熟考に値する、ということ十分に認めるとしても、アリストテレスの本来の、プロテー・ウーシアー $\pi\rho\acute{\omega}\tau\eta\ \omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$ 「第一の実有」の解釈としては、「第一の哲学」の探求対象としての全領域的な問題を正當に扱っている、『形而上学』A巻(本稿第1章参照)や、「感覚的実有」の根拠の問題を粘り強く扱っている、『形而上学』Z巻(本稿第2章参照)での議論を、「第一の実有」についての主要な見解とすべきだと結論する。そして『カテゴリーアイ』での「第一の実有」についての取り扱い(本稿第3章参照)については、アリストテレス哲学全体を射程に入れた全領域的な「第一の実有」についての議論に関する限り、無反省にその表現の代表的見解として扱うことは避けるべきだ、と主張する。そして本来の「第一の実有」とは、単に「実有」と記されているものの「根拠」、いわば「実有の実有」を示すための、特徴的な表現である。そしてこの意味での「第一の実有」は、『形而上学』A巻における「全領域的なすべての実有の根拠」についての探求や、『形而上学』Z巻における「感覚的な実有の根拠」についての探求にかかわる議論で、まさに問題とされていた、ということ、そして、『カテゴリーアイ』は、書物の性格上、様々な哲学的な議論をする際の前提となる、基礎教養に関わる著作であり、その文脈において、通常は「実有」とのみ呼ばれるものが、「第一の実有」と表現されていた、というのが本論文の結論である。

本稿における諸考察から、全領域的に「実有」を問題とした際の「第一の実有」、すなわち「第一の哲学」の対象としての「第一の実有」については、単なる「実有」ではなく、「実有の実有」とは何か、ということが問題となっている、という視点について考慮しているが、さらには課題とする「すべての $\omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$ 」という表現が、プラトーンが『国家』(Resp.IV.486a8-9)において、哲学者は「全時間、全存在」を相手にする、と気宇壮大に表現した時の、「全存在」にあたる原語のギリシア語が、「すべての $\omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$ 」という表現であったことにも言及しており、さらに広い視野を持っていることが窺われる。

他方で歴史的に最も有名になってきた『カテゴリーアイ』第5章における「個体」としての「第一の実有」は、この意味での「実有の実有」ではなく、単に「実有」である。それゆえ「実有」を「全領域的に」考察した際の根拠として最も重要なのが「第一の実有」であり、これこそが「第一の哲学」の課題である、とするならば、

「個体」を「第一の実有」と表現する『カテゴリーアイ』は、「第一の哲学」の直接の課題とは何か別のテーマを扱った著作ということになる。

伊藤氏によれば、『動物の発生について』の議論では、「生成」の際の「個体」の「類」に対する優位性が指摘されていたことに触れ、『カテゴリーアイ』では、いわば「生成消滅する感覚的実有」としての「個体」が、生成してから消滅するまでの間に起こりうることがらに限定した議論がなされていた。両者とも「生成消滅しない動かされえない実有」についての議論ではない、という共通性を有している。「個体」を重視する視点とは、このような「実有」の領域性に基づいた視点である、と伊藤氏はみている。そして他方で、この「個体」としての「第一の実有」についての言及が、テーマとしては、いわばアリストテレスの解釈の範囲を超えて、きわめて豊かな哲学的な議論を、古来、現代にいたるまで喚起し続けて来ている、という点を考慮して、哲学史的に重要な『カテゴリーアイ』を巡る種々の論点についても、「第一の実有」の解釈に関連する範囲で、以下のように検討している。

『カテゴリーアイ』での探求は、アリストテレスの学問分類の中での位置づけとしては、「第一の哲学」ではない、というだけではなく、「第二の哲学」とされている自然学のレヴェルの探求でもなく、「第一の哲学」や「第二の哲学」を含む、広い意味でのいわゆる「理論学」の中での探求でもない。さらにまたこの「理論学」に続く「実践学」の中にも入らず、さらにはまた「実践学」に続く「制作術」の中での探求でもない。そもそも『カテゴリーアイ』を含む、一般に論理学関係のテーマを扱っているとされている、いわゆる『オルガノン』とされている著作群が、アリストテレスの学問体系の中でどのように位置づけられるのか、という問題がある。そして、その『オルガノン』の中でも、『カテゴリーアイ』という書物はとりわけ特異な位置を占めており、この著作が、「第一の哲学」の直接の課題を扱っているものではないとしても、アリストテレスの学問体系の中で、どのような位置づけをされるのか、そして一体何を問題にした書物なのか、ということそのものが、大きな課題である。

本論文での考察によれば、『形而上学』 λ 巻や ζ 巻は、アリストテレスの哲学の内部では、「第一の哲学」について正面から論じた書物であるが、『カテゴリーアイ』はそのような哲学的な議論をする際の前提となる、重要で基本的な基礎教養に関わる著作である、ということになる。これはテーマに応じた役割分担をしている、と理解できると伊藤氏はいうが、その内実は未だ不明確ではあるが、これが本論文のテーマとは直接関係しないため、今後の研究の進展を期待したい。また、本論文は、ギリシア語のテキストを引用して丹念に分析しているが、その際、既存の日本語訳に代えて伊藤克巳訳が付されている。そこには、伊藤氏のアリストテレス解釈が反映している。その説明は注では十分に尽くされていないのでさらなる検討が必要であるが、和語で翻訳する試みは評価できる。

「実有」 οὐσία が、「それゆえにわれわれもまたそのようにあるものについて、何であるかを、最も主として第一に、いわばひたすらに観究めるべきだ」(Met.z1.1028b6-7)とする中心課題として、アリストテレスにおいて極めて重要な位置を占めることは疑う余地のないところであろう。そして「実有」のうちでも取り分けて「第一の」と限定される「第一の実有」 πρώτη οὐσία がその核心にあることは間違いないだろう。

本論文は、アリストテレスの「第一の哲学」の理解にとっての重要度に応じた順に正面から考察をすすめている。すなわち、「第一の哲学」について全領域的に、総合的に論じている『形而上学』A巻の議論をまず検討し(第1章)、次に、「感覚的実有」の根拠の問題について論じていると見なされる『形而上学』Z巻における議論について考究をすすめる(第2章)、その上で、古来、『カテゴリーアイ』における「第一の実有」についての真相に挑む、という正攻法をとっていることは評価される。これは結果的には、アリストテレス著作集 *Corpus Aristotericum* における、ページ表記の典拠となっているベッカー版のページ付けとは、逆の順序をたどる、挑戦的な考察である。また本論文は、分量的に最も頻繁に「第一の実有」という用語を使用している、『カテゴリーアイ』の用例(*Cat.5.2a11sqq.*)について、主に歴史的な経緯から、このいわゆる「個体」を示す用例が、アリストテレスの「第一の実有」(いわゆる「アリストテレスの第一実体」)についての代表的見解とされてきた定説を退け、「第一の哲学」の探究の文脈に定位する、大変意欲的な研究として評価できる。

以上のように、本論文は、十分に博士論文としてふさわしいものと判断される。なお、本論文での審査に際しては、文学研究科の内規に従って、2020年1月30日に、口頭試問・公聴会を行い、伊藤氏による論文概要の発表と、審査委員からの質問や意見表明がなされ、伊藤氏との討議が行われ、十分その力量が示された。審査委員は、その評価も含めて学位授与を可とする判断をするものである。

令和2年1月30日

主査 立正大学大学院文学研究科哲学専攻

教授 田坂さつき



副査 立正大学大学院文学研究科哲学専攻

教授 野矢茂樹



副査 東京大学総合文化研究科名誉教授

今井知正

